二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

スケバン特捜マキ
Sukeban Tokusou Maki
狂姦の学園

小説 新居　佑
挿絵 シケナオト

第一章　潜入捜査　006
第二章　蠢動　033
第三章　魔性の媚薬　057
第四章　湿った戦闘服　097
第五章　囚われの秘めごと　150
第六章　真逆　191
第七章　屈辱と恍惚の果て　206

登場人物紹介

Characters

十川(そがわ) マキ

元・伝説のスケバン。学園特捜班の捜査エージェントに任命された少女。

菅野(かんの) 速世(はやせ)

マキが潜入した白夜学園の、同じクラスの男子。不良たちのパシリ。

荒川(あらかわ)

白夜学園の不良グループを束ねる男。

加々美(かがみ) エレナ

荒川たちを陰で操る女番長。

『第三章　魔性の媚薬』より

「はぅぅっっ！　くぅぅ……っ」
男のゴツゴツとした掌が柔らかすぎる脂肪乳を乱暴に弄る。相手を思いやるソフトタッチではなく、こちらが感じているのを悦ぶような悪意の愛撫。
バスケットボールくらい簡単に掴めそうな男の掌で強く揉み込まれる度に、露出した右胸がまるでゴム鞠のようにぷにょぷにょとアウトラインを変えていく。
（あ、熱い……これがクスリの効果……あふぅっ）
肌を刺激する強い圧力によって、乳房は噴火寸前の溶岩地帯へと変貌していた。
男の指先から溢れる肉の丸みは、温められたバターのようにトロリと糸を引いているのではないかと錯覚してしまう。肉脂肪がこれでもかとギチギチに詰まった胸の中心部は、文字通り地球の中心で渦巻くマグマ溜まりを形成しているかのようだ。
「はふぅっ……はぁ……くぅぅっ」
荒々しく行われる外側からの刺激は、胸の内側をのたうつような快感をひっきりなしに生み出している。弾けるのを待ち続ける悦楽のポップコーンと化した爆乳がビチビチと快感の痙攣を起こす。
（くそ、気がだんだん遠く……だめだ、ここで屈したら……っ）
顔を紅潮させながらも、懸命に甘い声を押し殺そうと気を張り詰めた。吐息さえも漏らすまいと歯を食いしばり、気を抜けば砕けそうな足腰に力を込める。痺れて力がなくなり

かけた両手をグッと握って、女肉を溶かす魔悦の淫薬に徹底的に抵抗する。
「おいおい、我慢すんなよ。えぇ？　ビンビンに感じてんだろ？」
「……はっ、ふざけるな。そんなガキみたいなテクニックじゃ、クスリ打たれた女だって感じさせられるわけないだろっ。お前の竿から練習し直したらどうだ？」
小さな挑発。抵抗できない女しか抱けない連中だ。わずかずつでも奴らのプライドを擦ることができれば、そのうち必ず綻びが生まれる。それまでの間だけ堪え凌げれば。
「へっ、どこまでも生意気な女だぜ。おいっ」
荒川が目配せをすると、男の一人が頷き、マキを荒川の前に突き出すように押した。そのまま腕を背中で固められ、ガクンと膝を崩されると、床に膝立ちの態勢を強要された。
上を向き、薄ら笑いを浮かべる荒川を、無言のままキッと睨みつける。
「おっと、怖いねぇ。ま、そっちの方が堕としがいがあるってもんよ」
言った荒川は、自らの股間に手をやると、おもむろにズボンのジッパーを下げ始めた。
「っ、お前ぇ……っ」
目の前に突き出されたモノに、形のよい眉がグッと吊り上がった。
胸を弄られて悶える少女の姿を見て欲情していたのだろう。掲げられた男根は、すでにビキビキに勃起しており、触れれば燃え上がりそうな熱気を陰茎全体に纏っている。
（こ、これが……男のモノ……っ）

理性では強気の姿勢を崩さないスケバン少女も、初めて目にする男の勃起ペニスに堪らない嫌悪感と驚きを抱かずにはいられなかった。
股間の黒い森林からググッと突き出たイチモツは、正面から見据えると、まるでこの世のものとは思えない不気味さを放っている。軽くボールペンほどの長さはある肉棒は、先端からつるりと剥けた包皮が根元を雲のように覆い、そこから突き出る陰茎には赤と青の血管がおどろおどろしく浮かんでいた。
嫌悪に満ちた表情を浮かべているマキを見下ろすように、荒川が告げる。
「しゃぶれよ」
予想通りの言葉に、思わずきつく睨み返してしまう。いくら手出しができないといっても、剥き出しの男根を口に含むなどという屈辱を受け入れるわけがない。惚れた相手とならいざ知らず、相手は無抵抗な弱者をいたぶることしかできないクズ野郎だ。グッと歯を噛み締めて、荒川の要求を頑なに拒む姿勢を示した。
「おいおい、そんな態度でいいのかぁ？　へへ」
荒川は見張りの男からナイフを受け取ると、菅野少年の首筋をうっすらと刃先で舐めた。
「くっ、菅野……っ」
気丈だったスケバンの表情が困惑したものに変わる。鋭い瞳に映り込んでいる少年の顔は、恐怖と不安の色に染まっていた。

（ちくしょう。あたしは……）

ただ嬲られるのとは重みが違う。自ら男の肉棒を咥え込むということは、これまで築き上げてきたプライドをすべて捨て去るということだ。一匹狼のスケバン少女が唯一拠り所にしていた強気な信念を、自分の意志でこんなクズどもに捧げなければならない――。

相手は今わずかな隙を見せている。自分だけなら、なんとか助かるかもしれない。

（どうしてこんなにイラつくんだ……くそっ……はぅ、あ、んん……っ）

今すぐにでも反撃したいのに、身体が動かなかった。囚われの少年のことが頭から離れない。自分でもわからないわずかな動揺が、反撃の意志を妨げる。

下腹部にも熱い痺れが生まれていた。喉がなにかを欲するように、ゴクリと涎を飲み込み、理性が熱病にかかったかのように、半分ボゥッとしている。

心と身体。気丈なプライドに拮抗する二つの感情が、唇を噛むスケバン捜査官の口から、抑揚と抑え込んだ静かな声を吐き出した。

「……わかった」

それを聞き届けた荒川はニンマリと笑って、腰をグンッと突き出した。

「けけけ、それでいいんだよ。ほら、とっととしろよ！　この淫乱がぁ！」

荒川はグロテスクさを一層増す肉棒を、顔に近づけてきた。亀頭の縦筋から溢れ出し続けている先走り汁を、ツルツルとしたきれいな頬や顎先にジュルジュルと塗りたくってい

く。
顔中にべたべたとした牡の淫汁がまとわりついて、気持ちが悪いことこの上ない。香ってくる臭いは吐き気すら及ぼしそうだ。
（この……下衆野郎がぁっ！）
怒りで歯が軋みそうになるのをギリギリで堪える。短く少年の顔を見た。
（……っ）
どんな喧嘩でも気後れしたことなどないのに、自分でも驚くほどおそるおそるペニスの方に顔を向ける。いつも強気の言葉を紡いできた唇が大きく開いた。
「あむぅん……ふくぅぅ、んちゅぅ……」
チロチロなどとぬるいことはせずに、一気に根元まで咥え込む。上と下の唇に意外と柔らかい肉肌の感触が触れ、舌に太い陰茎がズルズルと這い回った。
（ふ、く……臭い。気持ち悪い……ぃぃっ！）
跪いて荒川を見上げる瞳は、いつもの気丈なままだが、特捜エージェントの心の内側は、感じたこともない屈辱と嫌悪感で壊れてしまいそうなダメージを負っている。
今すぐ吐き出してしまいたい。けれどそんなことはできるはずがない。
「ふぅ、んじゅるぅぅっ、はむぅ……ちゅるっっっ、ぐちゅぅぅ」
うっすらと瞳を閉じて、舌先をジュルジュルと動かしていく。わずかに脈打つ男根の本

体を、まるでウインナーにたっぷり乗ったマスタードを舐め取るかのように、上から下まで丹念に舐め込む。
「うぉ、イ……イイぜ、マキ。なんだよ、お前。くっ、めちゃめちゃフェラ上手ぇじゃねぇか？　その調子でしっかり扱けよ、くくっ。おら、返事はどうしたんだよ、返事は？」
「ふぐっ！　くぅ、はぁっ。う、うるさいっ！　誰がお前なんかに……っ！」
荒川の高圧的な瞳を睨みつけた。クスリで女を弄ぶようなクズどもに、そんな奴隷じみた真似をするわけにはいかない。
「けっ、豚がぁっ！　そんなこと言ってると……こうだぜ？」
怯える菅野の頬に、ナイフがグッと押さえつけられる。
「お前……ぇぇっっ！　くぅっ……あむ、んじゅぶっ、ぐちゅ……わ、わかり、はひた……が、頑張らふぇて、いららひまふ……はむぅぅっ、ちゅぶぁぁっっっ！　ぐしゅぐしゅぅっ」
涙が出るほど悔しい気持ちを抑えて、舌を肉棒に絡めたまま、首ごと唇を前後させ始めた。菅野を助けるためだと強く言い聞かせる。そうしないと、怒りで今すぐに口の中の肉棒を食いちぎってしまいかねない。
「それでいいんだよ……痛っ、歯なんか立てんじゃねぇよ！　なめてんのか、てめぇっ！」
「く、いい加減に……ちぃっ……も、申し訳ありません、はちゅ……れろ、んちゅぅ、ち

ゅぷぅ……ちゅぱちゅぱ……っ」

マキ自身、異性とのフェラはおろかセックスの経験もない。ただ同世代の女子たちが持つ程度の性の知識があるだけだ。人質を取られた女豹は渦巻く憎しみを必死に抑え、男たちの機嫌を損ねないように、全神経を使って男根の性感を学習する。

「ぷはぁ、はむぐぅっっ……ちゅるちゅる、ちゅぱっ……れろ、んぐぅぅっっ」

一度吐き出して、長大な竿を横から擦り上げるように、唇を滑らせる。瞬く間に硬度を増す勃起ペニスの亀頭だけを唇の柔らかい部分で包み込むと、舌先を先端の割れ目に押し当てた。

「んちゅるぅぅっっっ！　じゅるじゅるっっ……んはぁっ、はぐ、ぐちゅ……れろれろれろっっっ」

「う、うおおっっっ！　……な、なんて舌使いだっ。……く、くぅぅっっ、気持ちよすぎっ！」

これまでのペニス、そして荒川の反応から察した男根の中で一番皮が薄く、最も敏感な部位である亀頭を徹底的に弄った。

ギンギンに膨れ上がった先端を、高速かつ短いサイクルで扱き立てる。陰茎全体を握り込んだ掌が、ニギニギと断続的な刺激を竿に加え、情欲の血流を活性化させた。

（くっ、口が勝手に……あたし、どうしてこんなに激しく奴のペニスを扱いて……っっ!?）

ギアが壊れたような激しすぎる口奉仕は、明らかに過剰な反応だった。男たちの機嫌を損ねないためといっても、堪らない嫌悪感を抱いていた男根に、息も絶え絶えになるほどの奉仕など望んでいない。

嫌がる理性を、菅野のためにと必死に手綱を締めて、口を動かしてきたはずだ。それなのに今では、口や舌、それに掌までもが男を悦ばせるひとつの淫具になってしまったかのように、自ら快楽を求めて蠢き出している。

「んぐぐっ、ちゅぱちゅぱっ……ちゅぷぷ、ちゅぅっっ、はむぐぅぅっっ！」

（気持ちイイっ！　身体が……口が……ぁっ！　も、燃えてる⁉　止められない。ちくしょう……っっ！）

明らかに原因は先ほど打たれた媚薬だった。時間が経てば経つほどに、スケバン捜査官のうら若き肉体を、脂の乗った至極の性奴隷のものへと変貌させていく魔の媚薬。屈辱と嫌悪感で満たされた少女のプライドを、肉体の優先権を得た牝本能が追い込んでいく。

「こいつっ、そんなに好きなら俺が直々にてめぇの口の中を犯してやるよ！　おい！」

ペニスを弄られまくり興奮した荒川が、仲間に告げる。男たちは勃起肉棒を掴んだままの少女の両手を再び後ろ手に拘束した。

「おっと、まだ終わりじゃねぇぜ」

「ぐぅっっ！」

支えを失って倒れ込む身体が、荒川によって持ち上げられる。リーゼント男が荒々しく握っているのは、ロンスカと並ぶスケバン少女のもうひとつのトレードマークである赤いポニーテールだ。

「てめぇは俺の性欲処理女なんだ。好き勝手やんなよ。おらっ、根元まで咥え込みやがれ！」

「ぐぶぅぅぅっっっ！　おごぉぉっっ……ごほっ！」

無理やり唇が押し開けられ、荒川の隆々しい肉棒が、鐘に打ちつけられる木槌のような勢いで突き込まれた。太くて丸い先端が喉奥に達して、口の中が臭い男汁の香りでむせ返る。

「ふぅ、ふぅ……むごぉぉっっ⁉　んぐっ、むちゅ……ちゅぶぅぅっっ！」

「おらおら、しっかり扱けよ。じゃねぇと、菅野がどうなってもしらねぇぜ？」

結んだポニーテールを乱暴に掴まれての強制イラマチオに、女捜査官に施された媚薬が過敏に反応した。ともすれば顎が外れてしまいそうなほどの前後運動の中で、男の勃起ペニスの内側で蠢く海綿体を猛烈に刺激し続ける。

「んふぅっっ！　ふむふむぅぅっっ！　ちゅぱっっ！　ごちゅぅっっ！　ごちゅるちゅるるぅっ！」

一突きごとに、唇の端から溢れた涎がビチャビチャと飛び散って、冷たい床を淫らに汚

した。何度もむせては顎を痛めた。女のことをまったく考慮しない、男の歪んだ征服感を満たす不規則なディープストロークが、気丈なスケバンの唇と喉を無理やり支配する。
（こ、こいつ……無茶苦茶しやがってぇっ……ふぶぅっ、そ、それに……ああ、感じ……こんな奴のペニスで感じたくないのに……むちゅ、身体が欲しがってるっ！）
マキが対峙しているのは目の前の不良たちから受ける淫行だけではない。豊かに発達したセクシーな肉体の中の淫魔とも戦わなくてはならない。
「はちゅぱぁっ！　ああんっ、くちゅくちゅ……ひぅっ、んあぁっ……くちゅるぅっっ！」
無理やりの口奉仕で漏れ出る声の中には、確実に甘く悩ましげな美声が混じっていた。官能的にユサユサと揺れる二つの牝メロンは、片乳だけ完全にセーラー服から零れ落ち、黒レースのブラジャーから覗く乳首は小指大にまで勃起している。
（はぁうっ！　くぅ、胸まで……揉むのやめ……はぁはぁ……痺れる、頭の中がおかしくなって……ぇっ！）
目の前にぶら下げられた至極の撒き餌を、他の男たちが黙って見逃すはずはなかった。二つの乳房は、まるでつきたての餅のようなプニプニとした弾力で、執拗に揉み込んでくる不良たちの掌を楽しませる。
「んぐぅっっ！　むぐっっ！　ちゅぱっっ、ぺちゅくっっっ！　ああっ、はおぅっっ！」
募る悔しさが、上半身から溢れる悦楽の光に灼かれていく。口元を半透明な男汁と涎と

でベチョベチョに汚した孤高の女捜査官の腰がビクンッと跳ね上がった。快楽の炎が女の中心にまで引火しようとしている。

（はぁ……ふぅ、く、悔し……あたし、なんて情けない格好で……あぅぅっっ！　ひ、ひぃいっっ！　の、喉、乳首もぉぉっっ!?）

眉と目元だけを消えかけそうなプライドできつく吊り上げながら、赤髪の少女は唇をガクガクと前後に振らされた。突き出た喉から、涎の雫が落ちる。荒川のモノと同様に勃起したピンク色の乳首が、下衆な男たちの指先でコリコリと弄ばれている。休むことなく陰茎を先端から根元まで縦断する唇から、ジュブッジュブゥゥッッ！　と涎とも先走り汁ともいえない粘り気が滴り落ちた。小高く形のいい鼻から覗く鼻穴からは、フゥフゥと呼吸する度に、情けない鼻水が垂れ落ちる。

「ははは っ、さすがの俺もそろそろイキそうだぜ。さぁ、マキ。ラストスパートだ！」

「ふぁいっっ、はひぃいっっっ！　はぐぅぅっっっ！　ちゅぐっっ！　れろれろ、んぐぅうっっっ！　ちゅぱぁぁっっ！」

マキの顔が一際激しくシェイクされた。脳みそが激しく揺れ、舌と唇が勃起ペニスに絡みついては引き戻され、再びネットリと絡みつく。

（や、んおぉっ！　ペニスが膨れてる!?　やめ……んぁぁっっ、気持ちイイッッッ！）

押し寄せる不安と嫌悪感を、高鳴る快楽への欲求が一口で飲み込んだ。無念さが桃色の

電流によって破壊され、最後の一瞬まで口の中の肉棒に愛撫し続ける。
「イクぜっっっ！　おおっっ、飲み干せっっ！　マキィィィッッッ！」
ジュブチャァッッッ！　ドプドプゥゥゥッッッ！
喉ごと貫くような勢いで、口の奥まで亀頭が押し付けられる。最深部で爆発した荒川のペニスが、口いっぱいにベトついた白濁液をぶちまける。
「んおおおっっっっ⁉　んぐぅっっっ、ふごぉぉぉぁぁっっっ！」
汚物が逆流してくるような感覚に、意識が一瞬白く染まった。口全体に広がる悪臭に、自分の顔が牡ペニスの一部になってしまったかのような錯覚を覚える。
口だけでは入りきらずに、鼻にまで逆流してきたドロドロの精液を、まとめて吐き出してしまいたかったが、不良男子たちは少女の鼻を塞ぎ、荒川は腰を思い切り顔面に打ちつけてくる。精液にまみれた恥辱のスケバンは、屈辱に堪えてただ飲み込むしかなかった。
「ゴク……ゴキュ、ん……ふぐぉ……ゴクゴク、はぁ……んぁぁ……っ」
腐ったヨーグルトを更に熟成したかのような白濁液が喉を通り過ぎる度に、悔しさでどうにかなってしまいそうになった。
敗北という言葉を知らずに生きてきた孤高のスケバンにとって、一人の女を意識させられる辱めは、肉体的な痛みの何倍もの傷を、心に刻み込む。
「はぁ……はぁ……あぅ、く……あぁ……」

『第四章　湿った戦闘服』より

「あきゃぁぁっっっ！　らめぇぇっっ！　あぅっっっ、おほおおおっっっ！」
なにかがプツリと切れる音がした。我慢していたものが堪えかねたように、一瞬で崩壊する。
「……クッッ！　イクッッッ！　イックのほおおおっっっ！」
ブッシュゥァァッッッ！
今日、最大の潮吹きをもって、女肉がマキの牝豚宣言を祝福した。膣内でかき混ぜられすぎた女蜜が、ゴポゴポと泡状になって、バイブと陰唇の隙間から零れ出している。ビクビクと股間全体が痙攣し、失笑と嘲りだけが響く倉庫内に、鎖のジャラジャラという敗北を知らせる音が重なった。
「イクイク……ああっ、またイクゥゥッッ！　止まらない……あへぁ、イクのが……イクのがイイっっっ！」
「あははははっっ！　とうとう言ったよ。くっさい汁出しながらさぁ……あんたはもうスケバンなんかじゃない。ただの変態の牝豚さぁっ！」
バカにするエレナの甲高い声がわずかに聞こえた。しかし、最早そんなものはどうでもよかった。ただ更なる高みを目指して、極太のハスキーボイスが絶叫する。
「イクゥッッッ！　あはぁっっっ！　気持ちイイっっ！　気持ちよすぎ……っっ！　出るのっっ！　あらひ、潮吹いてイグのほぉぉっっっ！」

いつも他人を睨みつけていた瞳が、白目を剥いていた。情けなく舌をダランと伸ばし、唇の端から泡状の涎を零したいだけ零す。股間を最大まで開ききって、イキ狂うスケバン少女は、体感したことのない肉の愉悦に酔いしれていた。

「はぁ、ああ……ぁぁ。ふぁぁ……っ」

太く痺れるような、官能の声が止まらない。高く、そして長く続く絶頂の余韻が、スケバン特捜に淫らな囚人の印を刻み込んでいた。

すべてを解放し自らを貶めたマキは、派手に絶頂を極めたあと、再び埠頭へと連れ出されていた。

「エレナさん。準備できましたよ」

「そうかい。おら、牝豚！　いつまで浸ってんだい？　お目覚めの時間だよ！」

「ひぎぃっ！　う、あ……くほおぉぅうっっ！」

ゴッ、と靴先が、いまだ挿入されたままのバイブの底に直撃する。野太い声と共に仰け反りながら悶絶したマキに向かって、エレナが高圧的に言った。

「ふふ、いい反応だねぇ、マキ……いや、牝豚だったよねぇ」

「っ、はぁ……ふぅ、ふぅ……」

嘲る少女を睨みつける余裕さえなかった。顔を真っ赤に紅潮させて、全身で大きく息を

するので精一杯だ。呼吸の度に、露になった双乳が大きくユサユサと揺れ、勃起しきった乳首が天を衝く。

自らが噴いた牝蜜によって、淫猥なバトルスーツは更にその卑猥さを増していた。鎖で雁字搦めはそのままに、まるでスライム溶液でもぶっかけられたように、ヌメヌメとした密着スーツは、ところどころに開いた裂け目から、中の蒸れた牝の香り立つ空気を、ほんわりと周りに放散している。

更に、両肘と膝には、太い鉄パイプがそれぞれ一本ずつワイヤーで結ばれており、まるで男に股を開いた娼婦のような屈辱の格好で、地面に仰向けに転がされている。

そして極めつけは、胸と股間、それぞれのバイブにつけられた重りとワイヤーだ。勃起乳首に張り付いたままの卵型バイブはワイヤーで乳首を根元から締め上げて、釣りで使うような小型の重りが括り付けられた状態で、ダランと垂れ下がっている。股間の張り型には、底の部分に手足を固定しているものと同じワイヤーが巻かれ、それが目の前でエレナが跨がっているバイクの後ろの部分にがっちりと巻きつけられていた。

（こんな、格好……はぅ、くっ……いったいこれからなにをされて……）

まったく身動きの取れない破廉恥な拘束姿勢。これまで数々の修羅場を潜り抜けてきたスケバン少女とはいっても、じりじりと痺れる乳首にワイヤーを巻きつけられたことなど初めてだ。イったばかりの蕩けた理性が、先の読めない恐怖に動揺する。

「ふふ、これから牝豚に相応しいイキっぷりを見せてもらうよ」
言ったエレナがバイクに火を入れた。震える振動が股間のバイブへと直接伝わってくる。
「はぅっっ⁉　くふおおあああっっっ！」
ブオンッッ！　ブオオオンンッッ！
バイクの破壊的なエンジンの振動が、直接バイブレーターの振動となって、拘束された女囚の股間を揺さぶった。先ほどまでの突き込みと同等……いや、それ以上の責め苦に、気丈なスケバン少女はあっという間に、快楽の園へと舞い戻される。
（ふおぉっ……き、きついっ！　奥まで震えて……エ、エレナ、まさか……っ⁉）
火を入れただけでこれほど〝くる〟のだ。もしこれ以上エンジンがパワーを上げたら……。そしてバイクが動き出しでもしたら……。
「さぁて、いくよぉっっっ！」
「エレナ……待っ……ひぎぃぉぉおっっっ！」
制止の言葉は、唸りを上げたエンジン音にかき消された。視界が一瞬にして動き出し、唇からは感じまくった牝の咆哮が轟いた。
ブウウウンン、ブブンッッ！　ブオオオオオオオッッッッ！
「あひぃぃぃっっっっ！　当たる！　バイブが……響くっ！　あおおっっ、くるぅぅっっっ！」

がっちりと固定されたバイブレーターが膣内で激震に震えた。突き込まれた熱い鉄棒が、牝穴を信じられない速度でかき回し、圧倒的な快楽を脳髄に響かせる。
「あははっ、イイ様だねぇ。ほら、もっと鳴きなよっっ！　この豚がぁぁっっ！」
エレナが笑いながら、埠頭を爆走する。右に左にマシンを振り回し、急加速と減速を繰り返す。硬いコンクリートの地面をまるで罪人のように引きずられながら、スケバン捜査官はやむことのない圧倒的な快楽を叩き込まれ続けた。
「くひぃぃぃっっ！　やめ……らめろ……っ！　エレナ……止まれぇぇっっ！」
乳首、そして膣内のバイブから送られてくる快楽電撃に、すべての女肉が沸騰し、蕩けていった。バトルスーツを着用しているため、地面との激しい摩擦による痛みは皆無だ。しかし、バイクのエンジンによって生まれた激烈な振動が、直に少女の淫肉を刺激する。
バイブについた無数のイボイボが、ここぞとばかりに淫具としての真価を発揮してきた。ビクビクと震える快楽神経の中枢が、容赦なく抉られ擦られ、痙攣させられる。今までは横にゴシュゴシュと震えるだけだったのに、バイクの無理な挙動を更に捻じ曲げてフィードバックしてくる極太の魔根は、上下左右に緩急や深度までをランダムに変化させて、緊縛のスケバン捜査官を淫らな沼地へと引きずり込む。
ブゥンッ！　ブウォォンンンッッ！
「きひぃぃぃぃっっっっ！　やぁ、らめろぉぉっっ！　らめらめらめぇぇぇっっっ

っ！　らめろっふぇ……言ってるだ……ふおおぅぅっっ！　ひゅごいぃっっ……イクッッ！　イクゥッッ！」

抵抗することも、休むことも許さない魔悦の淫撃の前に、赤髪のポニーテールが揺れまくった。完全固定されているためにまるで動かない足腰が、バカみたいにブルブルと震えて、〝気持ちいい〟以外の感覚がなくなっている。唯一動く頭だけを、狂ったように揺さぶって、辺りに少女の涙と涎を撒き散らした。

「ほまへぇぇっっ！　頼む……止まってくれぇぇっっっ！　壊れる……あたしが、イキすぎて、気持ちよすぎてぇぇっっ！　狂っちゃうぅぅぅっっっ！」

瞳を思い切り開いて、金髪の少女に必死に思いを伝える。もうプライドもなにもなかった。初めて体感するイキっぱなしに、気丈なスケバンの心は、なんの抵抗もできずに陥落する。

「イクゥウッッ！　イッてるっっ！　エレナぁぁっっっ！　くほぅぅっっ！　イクイクイクイクゥウッッッ！」

ブオオオオンンンッッ！　と戦闘機のような爆音が鳴り響いた。激烈なバイブの振動が、マキの膣壁をびっしりと覆う快楽神経を根こそぎ刺激する。がっちりと黒塗りの極太張り型が突き刺さった陰唇からは、まるで勢いを増す噴水のように、トロ～リ濃厚な愛蜜がブシャブシャと噴出し続けている。

「あ、あは……んぷ、ひぐぅぅぅっっっ！」
端正な顔立ちが、涙と涎、愛液……あらゆる屈辱にまみれて、べったりと濡れていた。半ば白目を剥いたまま半開きの口をヒクヒクさせている様は、快楽に溺れた牝犬の表情そのものだった。
「あはははっっ！　なに涙流してんのさ？　そんなに気持ちいいのかねぇ。だったらやめてやる方がかわいそうじゃないのさ。もっと気持ちよくなりな、マキ……くははっ、あはははっっっ！」
ブオォォンッッ！　とエレナは思い切りエンジンを噴かして、レディースたちの方へと近寄った。
「さぁ、見てもらいなよ。孤高のスケバンが、ただの変態牝豚に成り下がった様をねぇ！」
バイクがレディースたちの周りを、荒々しいスラローム走行で何度も駆け抜けていく。マキは大股を開いた、まるで赤ん坊のような破廉恥な体勢のまま、憎き不良少女たちの間を見世物のようにイキまくった。
「み、見るなぁぁっっっ！　見るんじゃないぃぃっっっ！　あおおっっ！　見ないでくれぇぇぇっっっ！」
ブゥンッッ！　ブオオオッッ！　とエンジンが唸りを上げる度に、ブシュゥッッ！　ブシュブシュッッ！　と股間からはしたない潮吹きが行われ、レディースたちに嘲られる。

「いまさら泣き言なんてらしくないな、この牝豚ぁっ！　もう最高にエロい見世物だぜ！」
「ったくさぁ。品のない声で鳴くよね。おら、もっと鳴いてみなっ！」
グンッ！　と一人のレディースが、所在なさげに垂れ下がっていた乳首のワイヤーを踏み込んだ。
「ぎひいぃぃぃっっっ！　おごうぅっっ！　やめ……やめれぇぇっっっ！　乳首すごいいっっっ！　乳首乳首、イクゥゥッッ！」
ピンッと張られたワイヤーが乳首にすさまじいまでの激感を与える。小指大の一点に集中した快楽神経すべてが反応し、まるで第二の陰唇のように快感が弾け跳んでいる。
「ひぎぉおぉおっっっ！　乳首千切れるっっ！　ああっ、痛いのに気持ちイイ……やめれ……お願いれふから、やめれくらはぃぃぃっっっ！　イク、イキすぎて狂うっっ！　狂っちゃうからぁぁっっっ！」
自分が快楽の底に堕ちて戻れなくなる恐怖に、スケバン少女の理性が堪え切れなくなった。白目を剥いてイキまくるアヘ顔のまま、周りのレディースとエレナに懇願する。
（堪えられない……こんな気持ちイイの、堪えられっこないぃぃっっ！　またイクッッ！　狂う、死ぬぅぅっっっ！）
辺り一面は、マキが撒き散らした濃厚な本気汁で、いくつもの水溜まりができていた。走り回られる度にバトルスーツがジュリジュリと擦られ、そのすべてが悦楽の炎となって

拘束された身体を弾けさせる。
「くふふ、そうねぇ……そろそろ時間も迫ってきたし、イイよ。最後に思う存分イってきな……っ！」
「ひぇっっ⁉　ひふぉぉひぃぃぃぃっっっ！　あきゃああっっっっ！」
スロットルを全開にしたバイクが、淫らな女囚を引きずって、レディースたちから大きく距離を取る。そして、くるりと不良女子たちの方へと反転すると、一気に加速した。
「きゃふおおおぉぉっっっ！　気持ぢイイっっ！　イッちゃうっっ！　イクゥッッ！　イキまくるぅぅっっっ！」
百メートル以上引きずられながら、ひたすらイキ続けた。まるで股間全体を重機械でドドドッッ！　と揺さぶられ続けているような、恐ろしいまでの振動がかつてない快感を女体全部に迸らせる。
子宮が発火し、ドロドロになったマグマが爆発した。イってもイっても噴火は収まらず、身体中の筋肉が悲鳴を上げながら痙攣している。テカる漆黒のバトルスーツが限界まで張りを増し、スケバン捜査官を最高級のエロオブジェに仕立て上げる。
「……あばよっっ、マキ！」
エレナの台詞と共に、股間のバイブにつけられたワイヤーがピンッッ、とせつない音を残して切断される。牽引されるものを失った緊縛の肉体は、すさまじいまでの慣性に任せ

て、氷上を滑るソリのようにコンクリートの地面を跳ねる。勢い余ったマキの身体が、前転するようにひっくり返り、地面と乳首が擦れ合い、更には股間のバイブの底をしたたかに打ちつけた。

無様なまでに、レディースたちの眼前に突っ伏す。

「ひぎあああああぁぁっっっっ！　イクゥッッッ！　イク！　イク！　はへりゃぁぁっっっ！　イクゥッ！」

無様なまでに、レディースたちの眼前に突っ伏したスケバン捜査官の肢体が、ビクンビクン！　と跳ね上がった。股間からは壊れた配水管のように、大量の淫液が溢れ出し、強気な表情を崩さなかった端正な顔が、悦楽の涙と涎にまみれて淫惨なまでのアヘ顔を晒している。

「ひぐぅっっ⁉　ああ、出る……漏れる……漏れちゃうっ！　あふおおっっ、漏れるぅぅっっっっ！」

四つんばいの体勢で突っ伏した少女の、突き上げられた股間がブルブルと震えた。瞬間、盛大な潮吹きと共に香り立つ黄金水が、見下ろすエレナたちの前に噴出された。

シュバァァッッッ！　ジョロジョロ……ブシュゥッッ！

「あはははっっ、イキながら小便漏らしてるよ！　もうあんたの時代は完全に終わったねぇ、マキ。後はせいぜい幸せにイってるんだね、あはは、はははははっっ！」

『第七章　屈辱と恍惚の果て』より

（こ、こいつ……ぅぅっっっ！）

頬があっという間に真紅に染まる。周りに目やれば、言葉の意味を理解した生徒たちが、一様に自分の、淫らに緊縛され紅潮した身体を見ている。その顔には信じられないといった表情のほかに、不潔、最低、淫乱、ありとあらゆる罵倒の言葉が浮かんでいた。

「嘘よ！　マ、マキさんが……そ、そんなわけ……っ」

中野がおとなしい表情をしかめさせ、痛烈な抗議の言葉を吐き出す。彼女にしてみれば、マキはその身を挺して自らの窮地を救ってくれた恩人だ。勇気ある彼女がそんな淫らな人物であるはずがない。それは小柄な少女だけでなく、他の全員が思っていることだった。

しかし、小柄な少女の思いをくんでやることは、今のマキにできるはずもなかった。

「じゃあ、本人に聞いてみましょう？　マキさん、どうなんです？　あなたはマゾの淫乱売女ですか？　さぁ、答えてください！」

〝そんなわけないだろ！〟と、一蹴してやりたい。けれど操られた身体は、彼女の気丈な心を簡単にへし折った。

いたぶられ続ける赤髪の少女の身体が、少年の言葉に従って再び動き出した。緊縛された少女の肢体が、ゆっくりと屈んでいく。まるで赤ん坊のハイハイのような四つんばいの体勢を取らされてしまう。

スケバン少女の腰が高々と掲げられ、今まで見えそうで見えなかった超ミニスカートの

中が、あまりの淫靡さに息を呑む聴衆たちの前に晒される。
（あ、ぅぅっ……見られてる……こんなに濡れてるトコ……）
いやらしく開脚された状態で掲げられたお尻の丸みが露になる。悔しさと恥ずかしさに顔を真っ赤にしながら唇を噛む。不良美少女の脂の乗った形のいい桃尻が、まるで牡を誘うようにヒクヒクと小刻みに揺れている。強気の少女が晒す羞恥は、それだけで若い男たちをグッと引きつける卑猥な魅力に溢れていた。
トロリと垂れる蜜液がたっぷりと染み込んだパンティからは、なんともいえない濃いフェロモン臭がところ構わず放散されている。突き出された肉尻にピッタリと密着した黒のショーツからは、ヒクヒクと物欲しそうに卑猥に蠢く女の秘め穴がはっきりと透けて見える。縦に割れた牝のクレヴァスには、湧き出る本気汁に浸りきった股布がグチュッときつくねじれ込んでいた。
（あ、熱い……頼む、見るな……見られると感じ……頭が真っ白になって……ぇぇっ）
尻に集まっているみんなの視線が、まるで新たな媚薬のように身体を熱くさせる。操られた右手が自分を緊縛している分銅鎖の先端、錘の部分をギュッと握った。
（そ、そんな……やめろ……いや……挿入れるなぁあっっっ！）
理性の声などまったく無視して、身体の方は鎖に軽く口付けをし、垂れてきた唾で鎖を湿らせていく。うっとりとした表情で錘を見つめると、そのままパックリと開帳された陰

唇へとぶち込んだ。
ブジュゥゥッッ！　ズプッ！　ヌププゥゥッッ！
「ふむぅんんっっっ⁉　あふぉぉっっ！　んぶふぅぅっっっ！」
女体が恍惚の声を上げながら、ズコズコと鎖を子宮口に容赦なく押し当てていく。予想もしなかった激烈な一撃に、不良少女の理性が悦楽に染まっていく。
（んふぇりゃぁぁっっっ！　す、すごいぃぃっっ！　気持ち……いいっ、気持ちいいっっ！　鎖……深すぎ……いぎひゃぁぁぁっっっ！）
角ばったシャープなエッジで、ズズンッと子宮口を殴打された。一点に集中された快楽がお腹の中心で弾け飛んで、身体全身を甘い痺れに狂わせる。まるで快感の発電所が下腹部に存在しているかのように、ひっきりなしに発生される桃色の光が、女エージェントの理性を悦楽の淵へと追い込んでいく。
全身がビクビクと跳ね回り、肉付きよく太った太腿がガクガクと異常な痙攣を起こす。媚薬に侵された肉体は、すでに発情して焦らされ続けた牝のものだ。きれいなピンク色の肉壁が、突き込まれた鎖をギチギチと噛み締めて離さない。
「な、なんでこんなことするんだよ……マキさん、どうしちまったんだよ！」
「嘘だって言ってよ！　マキさんは私たちのクラスメートでしょう！」
生徒たちの声が悲痛さを増していく。大事な友達の淫らすぎる行為を信じたくはなかっ

た。夢なら早く覚めて欲しい。そう強く願う。
（やめ……くおぅっっ！　これ以上は、こんなこと続けられたら……本当に……堕ちて……ぇっ！　お願い、だからぁぁぁっっっ！）
やむことのない子宮口への連続淫撃は、媚薬でドロドロになったエージェントの身体をバターのように溶かしていく。わずか半日足らずの間に、幾度もの強烈な肉の高みを味わった牝本能が、理性の反抗を許さない。逆に快楽神経のすべてを過敏にして、スケバン少女の気丈な心を二度と帰れない妖艶の沼地へと沈めていく。
「おやおや、口が休んでますよ。おいしいでしょ、ぼくのチンポは？　あははっ、しっかりしゃぶってくださいよ、マゾ豚さん」
「んむんっっ！　ふぐぅっっ、おはぁぅっっ……はむ、れろ……っ」
連続する快楽の火花に表情すらも痙攣する中、前の穴から放散されるツンとした臭いと涎が混じりあって、甘酸っぱい牝の味へと変化する。
（あ……は、悔し……のに、感じて……おいしい……男汁、おいひぃぃ……っ！）
舌にネットリと絡まっていく牝の蜜の味は、堪らないほど甘露な味わいだった。屈辱の証でしかない先走り汁は、まるで魔性のクスリのように震える喉を潤していく。
見上げた視線の先には、菅野の澱んだ瞳がこちらをニヤニヤと見下している。自分がまだ抵抗できるところを示してやりたいが、身体に甘い電撃が走っただけで、そんな考えが

強烈な快感に易々と押し流されてしまう。
（イ……クッ！　また、はおうっっ！　イクイクッ！　っあ、止め……身体、動くなぁぁっっっ！　くおおおおっっっ！）
鎖を抜き差しされる度に爆ぜるエクスタシーの連続に、強気な想いが消し飛ばされていく。どれだけ大声で叫んでも、吐露されるのは操られた卑猥な嬌声だけだ。勝ち目の見えない己との戦いに、赤髪の捜査官の神経は確実にすり減らされていった。
見上げた視線の先には、菅野の澱んだ瞳がこちらをニヤニヤと見下している。自分がまだ抵抗できるところを示してやりたい。そう強く思う心は、瞬く間に押し寄せる快楽の波に飲み込まれる。
「はむぅんっっ……ぺろぺろ……あふぅん……はぁはぁ、じゅるじゅるぅぅっっ……れろん、ちゅぱぅっ……ふぅぅっ」
ペニスに飢えた恥女のように、息遣いを荒くして仇敵の肉棒を舌と唇で扱き上げていく。
最早身体のコントロールは完全に肉欲に奪われてしまっている。媚薬に染まりきった肉体は、自虐オナニーですら悦んで受け入れ、絶頂に昇り詰めた。
（ひぎいいいおおおぉっっ！　ああっ、らめぇぇっ！　イイッッ！　気持ぢイイッッッ！）
無様な四つんばいの下腹部に猛烈な快感が湧いた。鍛えられた腹筋が悲鳴を上げ、浮かんだ尻が信じられない速度で上下動を繰り返している。身体中の汗腺がブワッと開き、ビ

クビクと震える緊縛少女の上気した肌をいやらしく滑る。

（くぅほぉぉっっ！　らめ、らめっっっ！　イクイクイクイクゥゥゥッッ！　ああっっ、イカされる！　あたしがあたしに……壊されるぅぅぅっっっ！）

快楽漬けにされた自分の心が狂いかけているのに、身体はまったく気にしないことに恐怖を覚えた。しかしそんな感覚ですら股下で発生する甘い電撃に比べればかわいいものだ。

卑猥な割れ目に突き入れられた掌が、噴出し続ける愛液でべっとりと濡れている。限界までお尻を突き上げた艶かしい両脚がプルプルと震えた。もう立っていることすらできないはずなのに、腰の動きが止まらない。

「うあ……ほ、本当にオナニーして……マキさんって本当に……」

「エ、エロすぎるぜ……まるっきり恥女じゃねぇかよ」

淫猥を極めるセルフファックに、男女問わずクラスメート中の視線が向けられる。ただでさえ年齢以上の成熟したプロポーションで注目を浴びていた不良少女だ。その彼女が自ら股を見せ付けるようにして、激しいオナニーを展開している。AVでもなかなかお目にかかれないハレンチ振りに、年頃の生徒たちの瞳はいやでも食いついてしまう。

「あ、あんなに嬉しそうな顔して……」

「い、いやよ……なんで鎖なんかで濡れてるのよぉっ！」

見られているのも気にせず、むしろ妖艶な肉体を見せ付けるように悦楽に没頭するスケ

バン少女に、周囲の女子生徒があからさまな嫌悪感を示す。
　艶っぽい腰つきがガクガクと揺れて、ペニスを咥えた少女の唇と喉の色っぽいラインがグンッと跳ね上がる。垂れ落ちた眉根がきつく皺を寄せ、感極まったかのように全身がビクンッッ！　と硬直する。
「はぁはぁ……ん、ああっ。ふぐむぅぅっっ！　んちゅ、ぺちゅぅっ！　ふんああっっ！」
　弾けてもなお、鼻息を荒くして唇と手を動かし続け、肉欲を貪る少女。全身が発熱した汗にまみれて、唇から情けなく垂れ流された涎が、張り出した乳房を淫らに汚す。艶かしい魅惑の三角地帯にぴっちりと張り付いたセーラー服のミニスカートは、ブシュブシュと噴出されるあり得ない量の愛蜜によって、ネットリと汚れ、淫らな臭いを醸し出していた。
「マキさん、ほら。ちょっと見てくださいよ」
「ふぐぅぅっっ！　ぷ、は……っ」
　ポニーテールを掴まれて、無理やり上を向かされる。そこに映ったものにマキの心は激しく動揺した。
　見せ付けられたのは、自分をグルリと取り巻くクラスメートの男子たちの股間だった。きっちりと着付けられたズボンが、そこだけ妙に浮き上がっている。重力を無視して横に傾けたテントのように、はっきりとした盛り上がり。しかも一人だけではない。二十人以上いる男子の全員の股間が、見事なまでに押し上げられている。

更に彼らは、ハァハァと息を荒げており、もの静かな優等生とは思えないやけに鋭い目つきをしていた。若干前かがみに立ち、腰の辺りがカクカクと前後に揺れている。
「あ～あ、最低ですね。学園を守るエージェントが生徒を誘惑するなんて。まったく……」
生徒を守るエージェントにとって、最も屈辱な命令に、イったばかりの身体をブルブルと痙攣させながら、赤髪の少女の指が動く。
「な……くおぉっっ！　ふむぐっ、くひぃぃぃっっ！」
突っ伏した体勢のまま、両手をお尻の肉にかける。左右の人差し指と中指が迷うことなく皺のよった肛門へヌププッと挿入され、そのままグイッと押し開かれた。
「ほら、皆さん。挿入れて欲しいんだって。マゾ豚様が。ふふっ、尻穴にぶち込んで欲しいなんて、相当なアバズレですね」
「ひぎっ、おほぅっっ！」
男子生徒の一人が柔らかい尻肉をグニュリと掴んだ。ヌルッとした我慢汁が、肛門の皺にあたり、トロリと尻の丸みを伝っていく。男子生徒はそのまま背後からマキを抱くように、床に仰向けになった。マキは、四つんばいの体勢を無理やり引き起こされると、尻穴に突き込んだ生徒を下にした仰向けの姿勢を強要される。
「せっかくこんなパーティまで催したのに……エロすぎだって、このドM女！」
「そ、そうだよ！　何がクラスメートなもんか。変態だからお尻でも感じるんだろう？

まったく意地汚い牝豚だね！」

自分を容赦なく罵る生徒たちの声が、正義のスケバン特捜の使命感を抉る。背後に回った男子の手に力が入るのが、いやらしく変質した尻肉から伝わってきた。強制フェラと自慰行為によって火照りきった身体はとどめの一撃を欲している。想像したこともない恥辱と屈辱に、気丈なエージェントの脳裏に戦慄が走った。

ズブリュゥッッッ！

男子生徒の勃起した肉棒が、容赦なくメリメリと尻の蕾を打ち抜いていく。ついさっき開発されたばかりの肛門性感が、新たな肉棒を敏感に捉え、思い切り食い締めた。

「ひ……いぎぃぃぃぃっっっっっ！　おおっっ、くふぉぅぅっっっっ！」

淫らに広げられた肛門から、激烈な快感電流が迸り、しなやかな肉体がビビクンッ！と信じられないくらい跳ね上がる。緊縛で感じる気持ちよさなどまるで比較にならない悦楽の奔流が、スケバン捜査官の最後の理性を甘い光の園へと導いた。

ジュグリッッ！　ズズンッッ！　ゴリュゴリュゥッッ！

硬く、そして熱く勃起した肉棒に腸壁が押し上げられ、抉られる。欲情した生徒の立派なイチモツが腸壁を擦り上げる度に、顔が緩み、頭の中がトロトロに蕩けていった。

「イイックゥゥッッッッ！　おおおっっっっ、イクイクゥゥッッ！　お尻で……感じるっっ！　ズボズボされてイクゥゥッッ！」

堪えようと考える方がバカバカしくなるほどの気持ちよさが、緊縛のエージェントを飲み込んだ。守ろうと決めた正義の決意が、痺れる甘い快感へと変わっていく。抗うことなど一瞬もできずに、心の唇がただ気持ちいいという情欲の想いだけを解き放った。

（だ、だめだ……こんなに気持ちイイの……堪えきれるわけ……ないぃぃぃっっ！）

仰向けで大開脚状態の股間からブシュゥゥッッッ！　と濃厚な潮吹きが行われた。縮れ気味の濃い陰毛がズブ濡れになって、圧倒的な快感電流が、恍惚のスケバン少女の背中を一気に駆け抜けていく。

「す、すごいぜ。マキさんの……いいや。マキのケツっ！　俺のチンポにギチギチって食いついてきやがる！　ははははっっ、見たかよ、みんな？　こいつケツに入れられて感じてるぜ。やっぱ菅野の言ったことは本当だったんだな。このマゾ女めっ！」

男子生徒の宣言に、他のクラスメートたちも、秘めていた牡の本能を剥き出しにした。雪崩のように一斉に緊縛の不良少女に襲い掛かる。そしていきり立った己の勃起肉棒を、紅潮した柔肌に欲望のまま擦り付けた。

「んちゅるぁぁっっ……あふん、ペニスが……チンポがぁぁっっ！　はいひぃぃっ……んじゅる、くちゅっっ……はにゅぅぅっっ！」

春先の筍のように溢れ出る肉棒たちを、操られた身体が舌先で舐め上げながら、両手を使ってギュッと握り締める。蕩けた瞳で男根たちを見つめ、シコシコと扱き上げていく。

自分の意志ではないのに、溢れ出る快感だけは誤魔化せない。媚薬漬けになった若い肉体は、エージェントとしての使命を忘れて、爆発する気持ちよさを全身で受け入れた。

（ペニスに囲まれて……お、おかしくなる……あたしが、消えてしま……あひぃぃぃっ！）

ついさっきまで鋭い眼光と唇をへの字に結んだクールで勝気なスケバン少女は、恍惚の笑みを浮かべながら、目の前に掲げられた勃起ペニスに愛おしそうに口付けした。

「おおぅ、すごい……マキさんの頬、柔らかくて暖かい。最高に気持ちいいよぉっ！」

「太腿もいいぜぇっっ！　プニプニしてんのに、引き締まっててさぁっ！　まさにエロのためだけに存在するエロ脚だぜ」

口々に好き勝手なことを言いながら、男たちは少女の熟れきった肉体を弄んだ。ヌルヌルしたカウパー液が、切り刻まれたセーラー服を臭い男臭でコーティングする。最大まで勃起した肉棒を張りのある肌に擦り付けると、少女の肌がおもしろいほど痙攣した。

うっとりとペニス群を見つめるマキの後ろの穴が、キュポキュポと音を立てた。半分ほど抜き出たペニスと共に、捲れ上がった尻肉がヒクヒクと震えている。

「お尻じゃねぇ、ケツだよケツっ！　なに上品ぶってんだよ不良の変態のくせにさぁっ！感じてんだろ？　ケツに咥え込んでっ！　おらおらおらぁっっっっ！」

ドチュッッ！　ドチュッッッ！　ギュルルルッッッ！

男が熟れた尻たぶを力いっぱい握って、思い切り腰を打ちつけた。下から上に直接突き

抜ける連続淫撃に、後ろの穴からトロトロとした腸液が、愛蜜の代わりに溢れ出す。
　極上の潤滑油を得た肉ペニスが更にファックの速度を上げていく。まるで排泄物が無理やり逆流してくるような感覚に、少女の快楽神経が圧倒的な量の桃色電撃を発生させる。
「はおぅぅっっっ！　ああ、マキのお尻……んんっ、マキのケツがいいのぉぉっっっ！　グチュグチュ擦れてるっっ！　イクッッッ！　くほぉっっ、後ろで、ケツでイクッッ！　汁が噴き出るぅぅっっっ！」
　膣内より遥かに狭い腸道が、野太い勃起若ペニスを咥えて悩乱した。過敏に収縮を繰り返す肉壁を、突き込んだ男根が強引に押し返しては引き伸ばす。ゴリゴリと肉と肉が擦れ合い弾けるような快感は、前の穴では決して得ることのできない独特の甘美感だった。
　ブシュァァッッ！　と股間から高々と絶頂の潮吹きが行われる。すでに秘門を抉られる快感が癖になっていた。一突きごとにブチュブチュと溢れ出す淫らな腸液の臭いが、身体中から染み出している玉のような汗と混合して、少女の周りを艶やかなフェロモン臭が漂う。
　背筋をゾクゾクとした快感が走る。菅野に尻を貫かれたときにも感じた従属の悦び。守るべき生徒たちに嬲られる度に秘唇の奥がビクビクとわななき、悔しさを浮かべた美貌が、快楽に溺れたいやらしい牝犬へと変わっていく。
「ケツですって……なぁに、あの不良。ただの色惚け女じゃないの。犬みたいに舌を出して腰を振って……ガラの悪い女にはお似合いだわ」

マキの類まれな美貌に嫉妬する気丈な女子が、ここぞとばかりに堕ちた赤髪の少女をなじってきた。同性からの容赦ない嘲りに、学園を守る捜査官の誇りが汚され傷ついていく。けれど堕落の道を自ら選んだマゾ少女にとって、突きつけられた辛らつな言葉は極上の媚薬となって、牝の肉を快感で包む。

勢い余ってギュポッッ！　と雁首が肛門から抜け出てしまう。はち切れんばかりに膨らんだ傘の部分に抉られた肉穴が、硬派なスケバン捜査官をアナル絶頂へと導いていく。

グンッと思い切り反り返った細い喉を、垂れ落ちてくる涎が伝う。まるで熱病にでもかかったかのように頬が真っ赤に紅潮し、額からは大粒の汗がひっきりなしに流れ出る。大きく開かれた唇からは、卑猥な淫語と共に飲み干す暇さえ快楽にさらわれた牝の涎がビチャビチャと吐き出し続けられている。

「はおおおおっっ！　あ、あたしは、マキはぁっ！　変態マゾ女ですぅっ！　ケツで……なじられて感じまくってる、どうしようもなく淫らなスケバンマゾヒストなのぉぉっ！」

訓練でよく鍛えられ引き締まった淫肉は、何度絶頂に達してもより以上の締め付けで男のイチモツを離さない。愛液と腸液のミックスされた本気汁が、すごい勢いで放出される。

「くぁぅっ、堪んねぇぜ。おら、牝豚ぁっっ！　イクイク言ってねぇで、おい、俺のをしゃぶってくれよ。チンポ欲しいんだろ？　ほれほれほれっ」

身体に擦り付けるだけでは飽き足らなくなった男子生徒が、緩みきったアヘ顔を浮かべ

るマキの眼前に、勃起した男根をかざした。
「くあぁぁ……むふぅぅっっ！」
艶やかな熱気を帯びた鼻息が鼻腔を擽る。掲げられた肉勃起の淫力に唇が引かれていく。
（らめ……らめらのに……あらひは、学内特捜の……おぉっ！）
わずかに残った孤高のスケバンとしての何者にも屈服することのなかった気丈な意志が、快楽に屈することを最後の一歩で踏みとどまらせる。しかし、
ズリュリュリュッッ！　ズリズリッッ！　チュグゥッッッ！
「はぎぃぃぁぁっっっ！　おお……胸がぁぁっっ！　乳首ぃぃぃっっっ！　脇の下もぉっっ！　気持ちイイッッッ！　ああっ！　チンポ擦り付けられてイイッッッッ！」
擦り付けられた無数の男根が、まるで張り付いたスライムのように身体中を刺激した。破れたセーラー服に鎖で緊縛された身体から覗くあらゆる箇所に、溢れる我慢汁と熱のこもった牡肉の感触がなすりつけられていく。全身で生まれた破壊的な淫電流に、スケバン捜査官の誇りが悦楽の淵に沈んでいった。
（も、もうらめぇっっっっ！　堕ちる……堕ちたいっっ！　こんなの、我慢できない！　欲しい！　もっと気持ちよくしてぇぇぇぇっぇっっっっっ！）
少女の顔が、まるで欲しかった玩具を与えられたかのように、よりニヤけたものに変わる。目を蕩けさせ、ハッハッと舌を出してペニスを欲しがる様は、まるで調教された犬そ

のものだった。
「あ、ああっっ！　チンポ、チンポゥゥッッ！　欲し……欲しい！　マキ、チンポ咥えたい……おごぅぅっっっっ！　へれひぃいっっっ！　おおうぅ、ひんぽぉっっ！　ぺちゃ、ぐちゅ……ちゅぱちゅぱ……んぷぁっっ！」
　まるでモノのように乱暴に扱われることが気持ちよくて堪らない。背筋をゾクゾクと震わせながら、赤髪の少女は口いっぱいに肉棒を頬張り込んだ。
「あむぅんっっ！　れろれろ……ふじゅぺちゃぁ……くふぅん、ちゅるちゅる……はむぅっっ、ぺろ……くちゅくちゅ、あはぁ……っ」
　頬張る肉棒から立ちこめる臭い男汁が狂おしいまでに甘露だ。溢れ出る自らの涎と鼻が曲がるほどの牡の臭いが、舌先や喉の奥で混ざりあうと、なんともいえない芳しい淫香を発生させる。鼻をひくつかせながら、嗅覚まで淫らに染まっていく。この臭いを嗅ぐだけでイケるかもしれないとさえ思った。
「くくく、一本じゃ物足りねぇだろ？　おら！　二本一度に気持ちよくしてくれよなっ！」
「ごぶぉぉおっっっ⁉　あくぉっっ……ふぅんっ、げほげほ……はぁんっっ」
　肉棒の快感に浸っていると、いきなりもう一本突き込まれた。まるで特大アメリカンサイズのウインナーを無理やり押し込まれたかのような圧迫感だったが、肥大化した牝本能は、それをこそ待っていた、と言わんばかりに、突き込まれる二本の欲棒に舌を絡めて、

満足げな表情を浮かべた。
（あふぅぅっ、きついのに……苦しいのにおいしい。あは、やっぱりあたしって変態だったんだ。男汁がこんなにおいしいなんて……じゅるぅ、くちゅ……あおぅっっ、チンポイイ！　チンポ大好きぃぃぃっっっ！）
プライドや恥ずかしいという気持ちが、心の中から完全に消えた。十数本もの肉棒に囲まれて、ニヤニヤと笑いながら考えるのは、どうすればもっと気持ちよくなれるかということと、もっと虐めてというマゾ的思考だけだ。まるでおぞましい芋虫の大群に囲まれたような今の自分に、とても満足しているとさえ思える。
「ふおおおっっ！　む、胸……乳首ぃぃぃっっ！　擦られるとおかしくなるっっ！　ああっっ、乳首が燃えてるぅぅっっっ！　イ、イクゥッッ！」
グラビアでしか見られないくらいにまで張り詰めた爆乳にも、発情ペニスの群れは容赦なく押し寄せてきていた。まるで、まだマキの理性が残っているかのように、ツンと上を向いて勃起している小指大の乳首に、ズリズリと縦の割れ目が押し付けられる。ビンビンにまで膨らんだペニスとニップルで、お互いを弄りあうと、こそばゆさを遥かに上回る至極の快楽信号が発せられる。
まるでドームの中で音が反響するように、形のいいお椀形の乳房が、悦楽の炎を増幅して、詰め込まれた牝脂肪を蕩けさせていく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/